

しつこいほどのアウトプットによるリスニング指導

—Before and With Corona の歌唱活動—

今瀬 辰郎

1. はじめに

令和2年度、第1回大学入学共通テストが実施された。大学入試センター試験からの大きな変更の1つが、英語の得点比であった。リスニングの比重が高まったが、生徒たちにとってリスニングは、つかみどころがない技能であるようだった。学習の必要性を訴えても、2年次1月まで外部模試のリスニングの配点比率が低いこともあり、どうしても対策が後回しにされることが予想された。

2年前、前任校(岐阜県立岐山高等学校)において第2回大学入学共通テストの対象者となる1年生を担当することになった私はリスニングへの対策を検討していた。

第二言語習得研究において、リスニング能力に2つの段階があることは周知の事実である。第一段階は、音声を聞き分ける音声知覚(Perception)であり、第二段階は、音声の意味する内容を理解する意味理解(Comprehension)である。

切迫した動機と必要性がない生徒たちに対して、3年次におけるリスニングの成績の着実な向上のために、1年次には音声知覚と意味理解の基礎、2年次には意味理解の訓練を行うことを計画した。

リスニング習熟の時間を確保するには、いくつか課題があった。第一に量的な限界である。授業中だけでは英語の音声を聴き取る時間が圧倒的に足りない。門田によると、「シャドーイングのトレーニングにより、学習者の音声知識がいかに変容するかについては、①音声知覚の自動化、②音声知識検索の自動化を経て、③音声知識データベースの構造的変革という道筋が仮定できる」(門田 2007, p. 80)とのことであった。この①～③の段階を踏んで「意味理解」を達成するためには、第一に生徒の生活サイクル、すなわち学校外の生活の中に、シャドーイングのような能動的な活動を含んだリスニング練習の時間を創出させる必要があると考えた。

第二の課題は、魅力的な教材の不足である。問題解答形式のリスニング教材を反復したい生徒は稀であろう。楽しくない上に、音声は静止して構造を目視し確認するなどができないため、努力のコツが分からないからである。意欲と喫緊の必要性が刺激されない限り、外部模試の過去問題の実施中でさえ眼りに落ちる生徒が後を絶たないのが実情であった。

この2つの課題を解決し音声知覚と意味理解の力を向上させる方法として、2分間歌唱と1分間早口言葉の2つの活動を実践した。生徒アンケートとインタビューを実施して活動の効果を調査し、2つの活動ともに効果が優位にあることを確認することができた。本稿では早口言葉の活動については割愛し、歌唱活動について紹介していきたい。

2. リスニング力向上のための反復発声活動 歌唱

自身が発音できる音声は聴き取ることができるとよく言われる。楽しさや達成感を感じさせて意欲的に音声知覚の自動化、音声知識検索の自動化を実現し意味理解の基礎力を養う活動として考えた活動が歌唱である。歌唱の最も良い点は、上手に歌いたいという意識が、自発的に各自の音声をネイティブの発音に近づけたいという動機付けになる点である。歌の練習は自然とシャドーイングのように聴いた音声を発声する練習になる。門田は「シャドーイングが、意味内容の理解をめざす通常のリスニングなどと違って、知覚処理段階の訓練を積むための良い学習タスクになるのは、このように、理解で補填(compensate)できない音声知覚自体の練習に集中できることであると考えられます」と述べている(門田 2007, p. 65)。リズムや音程を合わせる必要もあるため、歌の練習は通常シャドーイング以上に意味理解よりも音声知覚の練習に集中できると考えた。

この案の発端は、東進ハイスクールの2017年夏のセミナーでの安河内哲也先生の講演で、リスニン

グの学習方法は洋楽や洋画などで楽しく学ぶことだと推奨されたことであった。積極的にリスニングを反復させる方法を思案し、やはり歌か、と感じた。洋楽に親しむ生徒も多く、一斉指導が可能である。リズムにのって楽しめるし、歌詞は抽象的な単語も含むものの感情移入ができるため記憶への定着度合いが高い。加えて中高生といった多感な時期に覚えた歌の歌詞は、成人してからも覚えていることも多い。私には過去の勤務校(岐阜県立飛騨神岡高等学校)において、2015年に進学クラスの生徒に1曲全ての歌詞を暗唱させる指導を行った経験があった。22名全員にマイクでの暗唱パフォーマンステストを実施し、1曲の反復暗唱の効果は熟知していた。夏のセミナーでヒントを得た私は、早速令和元年度の夏休み明けから授業のウォーミングアップとして歌唱の活動を開始した。

授業の進度に支障をきたさないよう、歌唱の時間は厳密に1授業につき2分以内に抑えることとし、令和元年度(Before Corona)と令和2年度(With Corona)の2年間にわたって活動を継続した。

令和元年度の課題曲にはイギリスのロックバンドの曲を選んだ。日本の学校教育で触れる英語の多くはアメリカ英語であるし、私自身がアメリカ留学を経験してイギリス英語の聴き取りが不得意だった過去があり、リスニング対策というからにはイギリス英語にも慣れさせたいと考えたからである。

音声知覚の自動化と音声知識検索の自動化に基づく意味理解の能力向上が目的であるので、1年間で1曲をしつこいほど反復練習することにした。しかも前期は2分間で1番を2回繰り返すという形で反復を徹底した。後期、1番の歌詞が暗記できたと思われる頃によく1番と2番を1回ずつ流す構成で歌わせた。最初に高度な文法事項やなじみのない口語表現を解説し、日本語の歌詞も示して歌唱活動を行った。

この歌唱については、以下の3つの「超える」を意識して活動を行った。

(1) 授業を超える

リスニングへの意欲を高めることが最も重要であった。忙しい高校生が授業外や長期休業中の生活の中に自ら英語を聴く時間を創造するには、遊びと融合することが最善と確信して活動を開始した。

(2) 国を超える

外国語で話すのが下手でも、歌やスポーツにはコミュニケーションを円滑にする力がある。私が非英語圏に一人旅をした際には、乗り合いタクシーで日本の歌を披露して友好を深めたり、英語の歌を上手に1曲歌えると認められて周囲との距離感を縮められたりすることがあった。将来、生徒たちの何割かは外国の人とかかわって生活する。1曲でも即興で歌える英語の曲があれば、多国籍の人々と友好的な関係を築く潤滑油になると感じた。

(3) 時間を超える

高校生の時期に歌って覚えた歌の歌詞は、数十年記憶に残る。私自身、中学時代に地元の姉妹校交流派遣で中国に行った際に覚えて歌った吉田拓郎の『結婚しようよ』の中国語版の歌詞を今でも口ずさむことができる。そしてその歌を思い出すと当時のことをうっすらと思い出す。

思春期に1年間を通して同じ歌を歌い、友人とカラオケで盛り上がり、家庭でも口ずさむ。そのような経験から体に染みついた歌は、一生の財産となる。街でその歌を聴いたり高校時代の旧友とその歌に触れたりすれば、いつでも当時の自分に戻れる。薄れた記憶や友情を繋ぎ合わせる糸のような役割を果たすであろうと考えた。さらに、New York Timesに掲載された調査によると、“When do the strongest adult musical preferences set in? For women, it's age 13; for men, it's a bit later, 14.”(2018年, analysis of Spotify data)つまり13～14歳頃に聴いていた歌がその後の音楽の好みを決めるということだ。調査データによると16～17歳で聴く歌も影響のピークを過ぎているもののその後の人生における音楽の好みに非常に強い影響力を持つことが分かっており、この時期に洋楽を1曲歌いこなせるようになることで、文化的な価値観を広げることができるのではないかと考えた。

これらの3点の狙いを心に秘め、生徒には受験対策という実利的な目的のみを説明して活動を行った。門田によると、「私たちの聴覚など感覚入力過程が持つ「選択的注意」というしくみのために、文字+音声の同時処理は実は不可能」(門田 2020, pp. 30-31)ということであったが、授業で約百回聴かせ、授業外でも何度となく聴く中で、各自が自身の習熟状況に合わせて選択的注意を働かせることを想定し、意図的にダブルインプットとなる活動にした。門田

の書では「シャドーイングの学習ステップ」が紹介されていた(門田 2018, p. 156). しかしながら, マニュアル的な過程を繰り返すよりも, 生徒の興味のある言語材料を与えて主体的にしつこいほど反復するよう促すことが習熟にはより効果的であると考えた. カラオケで歌おうとする生徒などは, 授業外で, 苦手パートに絞って門田が勧める「聞いてそのあといったんポーズを置いて繰り返すというリッスン&リピート形式」(門田 2020, p. 31)で練習することが想定できたので, 授業では最低限の時間での実施を心がけ, 2分間で歌を2回通して歌うという活動に徹した.

また, 歌唱活動には感情移入による効果も見込んでいた. 門田は「ミュージカルの場合, 次の4要素が統合されることとなります. ①言語(台詞)②身体運動(演技)③共演者との交流④情動(登場人物への没入)」(門田 2020, p. 145)と述べている. 歌は, ③共演者の交流以外を含む, 身体でリズムを取りながら台詞を伝える活動であり, 感情移入するほどインプットの内容だけでなく発音も定着しやすいと考えた.

令和2年度はコロナウィルスのパンデミックによる2か月間の休校から始まった. 共通テストまであと2年を切る中, 授業で実施可能な活動に制限が発生した. リスニング対策としては, 英語表現の定期考査におけるリスニングの配点を30%に増加することと, マスク着用下で音声を抑えながら歌唱練習を行うことを実施した.

2年次の課題曲は年度末のアンケート結果を考慮し, イギリス出身とアメリカ出身の男性2人のアップテンポの曲とした. より高速な音声でも正確な音声知覚に基づいた意味理解が可能になることを目標として, 歌詞の単語・文法が易しく速度の速い曲を選んだ.

3. 実施と調査結果 Before & With Corona

2年間の調査結果は以下の通りである.

対象:

令和元年度(R1): 英語表現Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅰ(各週3単位)の生徒5クラス190名

令和2年度(R2): 英語表現Ⅱ(週2単位3クラス)・コミュニケーション英語Ⅱ(週3単位2クラス・4単位1クラス)の生徒6クラス231名

歌唱に関する調査結果(人)

R1 (Before Corona) / R2 (With Corona)

- ① 歌をしっかりと聴き口ずさむことができましたか.

	A	B	C	D	合計
R1	3	35	115	37	190
R2	6	83	111	29	229

- A 最後まで歌詞を眺めていた, 聞き流した
 B 口を動かさず心の声で歌っているつもりだった
 C 後期から聴きながら口ずさみ始めた
 D 開始当初から口ずさみながら聴けた

- ② 授業で聴くようになってから, 歌を授業以外で聴いたり歌ったりするようになりましたか.

	A	B	C	D	合計
R1	50	91	9	40	190
R2	74	124	15	18	231

- A 聴かない, あまり聴かない C 頻繁に聴く
 B 時折聴く D 歌う

- ③ 普段から, もしくは授業や共通テスト対策の情報きっかけに, 学校で学ぶ英語の音声や授業で流す歌以外に英語の音声に触れていますか.

	A	B	C	合計
R1	79	70	41	190
R2	69	95	67	231

- A あまり触れていない C 以前から触れている
 B 触れ始めた

- ④ 開始当初と比べ, 聴き取れる歌詞の量は増加してきたと思いますか. (R1: 各クラス80~90回聴取, R2: 2単位クラス約100回, 3単位クラス約150回, 4単位クラス約200回聴取.)

	A	B	C	D	E	合計
R1	0	9	0	140	41	190
R2	0	9	1	179	42	231

- A 全く変わらず D ある程度増加
 B あまり変わらず E 大きく増加
 C 最初から聴き取れる

- ⑤ 開始当初と比べ、この歌以外の全体的なリスニング力(他の洋楽、動画、定期考査、模試など)は向上したと感じますか。

	A	B	C	D	合計
R1	0	53	126	10	190
R2	4	63	154	10	231

- A 全く感じない C ある程度向上した
B あまり感じない D 大きく向上した

- ⑥ 歌 1 番のディクテーションテストの結果(問)
(抜き打ち・同問題 20 問。令和元年度のみ実施)

R1	8 月末	11 月末	2 月末
正解数	未実施	10.9	13.0

対象：英語表現 I 履修生徒(11 月 79 名、2 月 75 名)

- ⑦ ②と③で A と回答した、授業以外で英語の音声に触れない生徒の④(聴き取れる歌詞の量)の回答

	A	B	C	D	合計
R1	0	4	17	4	25
R2	0	2	23	6	31

- ⑧ ②と③で A と回答した、授業以外で英語の音声に触れない生徒の⑤(歌以外のリスニング力)の回答

	A	B	C	D	合計
R1	0	8	17	0	25
R2	1	13	17	0	31

4. 考察

①について、R1 と R2 で数値の分布は似ているように見えるが、令和元年度(Before Corona)においては、後期以降は非常に多くの生徒が口ずさむことができた。一方で、令和 2 年度(With Corona)においては心の声で歌っていたという生徒の増加が目立った。マスク着用となり、大きな声を出すことが自粛されるようになったこともあって口ずさみづらい環境となったので、この変化はやむを得なかった。また、令和 2 年度の曲があまりにも速いため前年度の曲に戻してもらいたいという要望も複数あった。

②について、令和元年度では 140 名、令和 2 年度では 157 名の生徒が授業外で課題の曲を聴いたり歌ったりするようになった。2 年間、授業時間以外において生徒の生活の中にリスニングの時間を創出することができたといえる。特に令和元年度には、友人とカラオケで課題曲を歌うようになったという報告が多くあった。そこでは格好よく歌おうとするもので、生徒は積極的にネイティブの発音をまねるようになった。一方、令和 2 年度における「D 歌う」という回答の少なさは、コロナへの不安の影響もあるものの、やはり歌の速度が速すぎて、自信をもって歌えるまで習熟できた生徒が多くなかったことも要因の一つと考えられた。選定した曲が生徒の現状に合っていなかったと感じた。

③において、授業で扱う歌以外に A と回答した生徒、つまり英語の音声に触れていなかった生徒が令和元年度に 79 名、令和 2 年度に 69 名いたと回答したことから、この活動が生徒のリスニングの活動への取り組みの機会や時間を創出する役割を果たしたといえる。また、B と回答した生徒の人数からは、共通テストの情報や歌唱活動などの意識啓発指導によりリスニングに取り組み始めた生徒がいることが確認できた。

一方で、②③の結果から、令和 2 年度の定期考査におけるリスニング配点引き上げよりも、歌唱活動のほうが学習の動機付けになっている様子が浮き彫りになった。

④と⑥の結果から、年間を通じての課題曲の反復によってその歌の音声を聴き取る力は向上したといえる。④の主観だけでなく、令和元年度に行った抜き打ちによる客観テストの結果⑥からもそれを裏付けることができた。

⑤の結果からは、2 年間共に非常に多くの生徒が課題曲以外の全体的なリスニング力の向上を実感できたことが分かった。

⑦⑧は、②③において A と回答した生徒、つまり授業以外で英語の音声に触れることのできた生徒の④⑤のアンケート結果を抽出したものである。④歌の歌詞についても⑤歌以外の全体的なリスニング力についても半数以上の生徒が改善を実感していることが分かり、歌唱の活動の効果といえる結果であった。

自由記述欄では、以下のようなコメントがあった。

- ・模試や実用英語技能検定のリスニングの成績が向上した。
- ・ふだんのリスニング教材のディクテーションの問題が年度初と比較して格段にできるようになった。
- ・リエゾンや前置詞・代名詞の消音が聞き取れるようになった。
- ・動画のセリフやテレビのニュースが聞き取れるようになった。
- ・街角で聞いた音楽の歌詞が何となく聞き取れるようになった。
- ・この活動をきっかけに洋楽を聞くようになった・洋楽を好きになれた。

令和2年度には、授業中に積極的に歌う生徒が減少し、カラオケで友だちと楽しみながら切磋琢磨する機会がなくなった一方で、「マスク着用で息が詰まる学校生活の中、英語の授業の最初の音楽でリラックスすることができた」「英語の音楽を聴くと英語の授業に気持ちをきりかえることができた」というような心理的効果が書かれるようになった。門田の「英語も含め学習のための準備状態(レディネス)を音読が高め、その後の学習活動をよりスムーズにしてくれる」(門田 2020, p. 78)と同様の効果を歌が引き出したといえる。これらの精神的な効果は、With Corona の時代の行動制限によるストレスの多い生活の中で、生徒自身が音楽の活動が持つ副次的な効果を実感した結果であろう。

5. まとめ

年度最後の授業において、活動についての最終アンケートを行い、歌唱活動が、共通テスト対策という当初の目的に加えて、2章で述べた「授業を超える」「国を超える」「時間を超える」という3つの観点に基づいているという意図を説明した。

驚いたことに令和元年度のあるクラスでは、最後の説明をし授業を終わろうとしたその時、「先生、最後にみんなで歌を歌いましょう」と生徒が言った。突然の出来事に呆然とする私をよそに生徒が用意した音楽が流れ始め、全員で大合唱したのちに寄せ書きを受け取るという結末となった。予想外の生徒たちの温かい挨拶に胸が熱くなった。

2分間の歌唱。たったこれだけの活動だが、毎回

の授業でしつこいほど反復することによって、生徒は自身が持つ音声知覚データベースの枠を超えることができた。加えて期待通り授業を超えて言語材料に積極的に取り組むようになり、自身の興味の枠を越えて新たな喜びを感じ、過去の自身のリスニングの能力を超えることができた。予想外の転勤により生徒たちの英語力を3年間にわたって見続けることはかなわなかったが、生徒たちの成長は進路実現に向けた学力の壁を超えるにとどまらないであろう。数年後には洋楽が国籍や文化を超えるコミュニケーションツールの1つとして効力を発揮し、さらには時間を超え、人生を豊かにする楽しみの1つとなり、With Corona の時代を遠く乗り越えて高校時代を懐かしみ、旧交を温めることに寄与することができると確信している。

参考文献

- 門田修平(2007). 『シャドーイングと音読の科学』. コスモピア.
- 門田修平(2018). 『外国語を話せるようになるしくみ』. SBクリエイティブ.
- 門田修平(2020). 『音読で外国語が話せるようになる科学』. SBクリエイティブ.
- Seth Stephens-Davidowitz (2018, February 10). The Songs That Bind. *New York Times*. Retrieved July 12, 2021, from <https://www.nytimes.com/2018/02/10/opinion/sunday/favorite-songs.html>
- English Hub 編集部「第二言語習得から考える、なぜシャドーイングがリスニング力向上に効果的なのか？」English Hub. Retrieved July 12, 2021, from <https://englishhub.jp/sla/shadowing-listening>
- Daniel Sanchez (2018, February 12). Study Finds that Most People Have Formed Their Lifelong Musical Tastes by Age 14. *DIGITAL MUSIC NEWS*. Retrieved July 12, 2021, from <https://www.digitalmusicnews.com/2018/02/12/spotify-study-musical-tastes/>